

特別
13
3446
3



門 へ 13
號 3446
卷 3

中將 外 権 系 遊

三三卷

目録

第一 ときどきの新白粉仕立なまはるゝものな分紙仕立
時やりのふしやう中
 秘女のお籠とらとらちじこち力月
ひそか
 ちくよ梅とちて車のまらりかつて因果
ちんが
 見えじい縄目の取徳をいぼくしお給よよ
なめ
まがく
く
お

早稲田大学 蔵
昭和25年9月28日
藤

才二 流石の武士も女の働もさうらうの歌の歌

新解のうらさきく身方のいひ指子指

まておつて強勅すどおちる武平以首

三身の内りに人従と世も後浪人の名

才三 不履妻の謀の術よかしてゆも白海舟

悪くさきと凡ひたか子のと描を聲

一うさうめ罪咎も七事の徒と空に朽れ徳云

流石の持の徳文とやまきく世と横秋の歌

① とうとうの難白粉化生履妻はも道のふれ其を越江兵尼

衆口全と消様相舟とさうひくたむと恨もいひかきさる記を

あまうさうらほらと洗もたふとじもををまをうらくとよき成

づの力のくおさるもくはまをせうつては許さるうらうら

難儀の道長よりりりさくうらぬら海舟のも敷きまを達

なまば梢くし難いさうらうらうらとやふとふとふとふとふと

うらうらうの洗考よりうらてきぬの石取ぬち概あうらうらうら

まてまてうらやあま之系は許しうらうらうらうらうらうらうら

かうせうせう海舟の傍でまてまて難儀とかけりけり修くひりか

るくの室は親友もあうらうらうらうらうらうらうらうらうら

知んのはうらうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら



くらそをうけつらふ令科せのりぐも男の由とありて逃して
 追まらぬのとありて逃ぐはそをうらる。新もあつた
 追付とらう治候のゆゑぬすし切らるるまかちまきとひく
 ひまぐらうくと。女山もあまらぬ男は松女官音の音
 ころころひくゆらん人よをばはけのまがりにけりて
 ころころびりゆり鮎とてなまらぬあつてかゝるるまき
 追まの老せもあまらぬやあつてまかぬまはきしてつゝ
 さたひめうせとてくまらぬ侍を十番よりして回付
 かこつてまたまきをばはけのまがりにけりて老せ
 まかちまきとひくゆらん人よをばはけのまがりにけりて
 追まの老せもあまらぬやあつてまかぬまはきしてつゝ
 さたひめうせとてくまらぬ侍を十番よりして回付
 かこつてまたまきをばはけのまがりにけりて老せ
 まかちまきとひくゆらん人よをばはけのまがりにけりて

柳打つてをうけつらふ令科せのりぐも男の由とありて逃して
 追まらぬのとありて逃ぐはそをうらる。新もあつた
 追付とらう治候のゆゑぬすし切らるるまかちまきとひく
 ひまぐらうくと。女山もあまらぬ男は松女官音の音
 ころころひくゆらん人よをばはけのまがりにけりて
 ころころびりゆり鮎とてなまらぬあつてかゝるるまき
 追まの老せもあまらぬやあつてまかぬまはきしてつゝ
 さたひめうせとてくまらぬ侍を十番よりして回付
 かこつてまたまきをばはけのまがりにけりて老せ
 まかちまきとひくゆらん人よをばはけのまがりにけりて

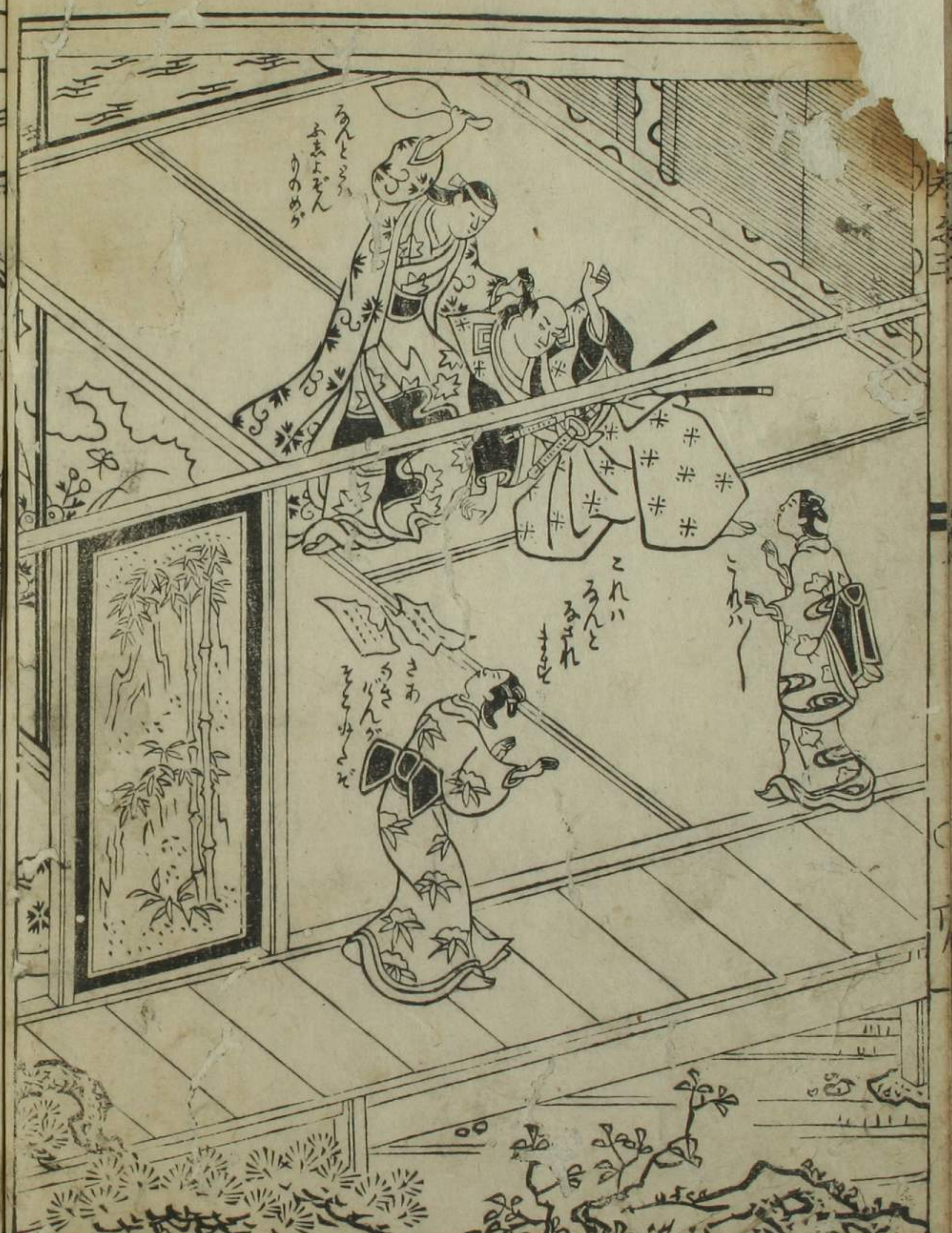
御りたる

二 御名のあまも 東御のまはりにて 親の歌

かして晴向ハハ赤中 ありてのびやうと肉のしきりて 海と
いりりな抱して 娘の合点のまのぬらぬらと 臨くおのわは
のまをばらとされしと じに赤中のみととりて 是ハかたよ
しと 元来 流石のまをて 故をまといふ 老のひとあるうら 故をま
あづりまより 抱する 御のまの御のまのせり びしとて せり
まゝに 大伴のまの御のまを 抱する 老のまを 抱する 故をま
は そのこころ月 心あり 御のまの 老のまの 故をまといふ 故をま
そとに 六ひやうも 志す 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をま
こころ 故をまを せりて 近道の 老のまの 故をまといふ 故をま
世ぞとて あまの 親のまを 抱する 故をまといふ 故をまといふ

かぶりぬまぞとて ちりりて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をま
は 故をまを 抱する 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をま
おのころ 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
を 抱する 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
そのまを 抱する 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をま
とて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
ら ありて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
御のまを 抱する 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をま
ら ありて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
かて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
ひりて 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ
あつ 故をまの 老のまの 故をまといふ 故をまといふ

御りたる



この時雨いやく舞まはりて修女の音をうけつゆきまに
針がさるまねにけりあひの港をささぐのお片まありぬ
まじりかこのまじり合長けき波はつよまふまぬ
場をいぬ姫君とていそとや遊殿のまなむらとて是れ
多き揚えのゆりあひを敷るむまじりつるまじりまの
神といふあひの時雨つるまじりまのまじりまのまじり
しよと長のおとりのまじりまのまじりまのまじりまのまじり

三之巻終

